37

鍼灸歌賦の研究
――「玉龍歌」

宮川浩也

一、はじめに

経穴の臨床応用は、伝統的には『銅人兪穴鍼灸図経』を代表とする経穴書を基礎とする。しかし、宋から金・元にかけて盛行した鍼灸歌賦には、臨床から直接生み出された経穴の応用が展開されている。つまり、経穴書だけが経穴学の研究史料ではなく、臨床と密着している鍼灸歌賦も欠かせない。また、鍼灸史を考える上でも重要な史料である。

題材にした「玉龍歌」は『扁鵲神応鍼灸玉龍経』に収められていて、早期の鍼灸歌賦の一つである。『扁鵲神応鍼灸玉龍経』は王国瑞の編で、一二九五年以前の成立と考えられている。「玉龍歌」は、本文と注文とで構成され、どちらも作者は未詳である。黄龍祥氏は、本文・注文ともに金元の鍼灸大家の竇漢卿と関係が深いとみなしている（『鍼灸名著集成』、華夏出版社、一九九七）。

二、内容構成

本文は、七言四句で一首をなす韻文である。合計八十三首で構成される。一首には、一病症に対する治療穴が提示される。示された兪穴は一二〇種で、経穴一〇六種、奇穴一四種に分けられる。注文は散文で、主として兪穴の位置や刺灸法を解説する。

三、本文の特徴

①病症と兪穴の関係を、時代が近い『銅人兪穴鍼灸図経』（一〇二七刊）と比較してみると、差異がみられた（近部取穴を除く）。やはり臨床から直接生み出されたものと思われる。たとえば、脊膂の強痛に人中（水溝）、瘰癧に天井、吹乳（乳癰）に少沢など。

②基本穴の頻用。たとえば合谷・中・三里・気海などは複数病症に応用されている。

③横透刺を指示している。眉目の痛みに攢竹から魚腰（眉中央の奇穴）まで、頭風に絲竹空から率谷まで、皮下に沿っての透刺を指示し、「一鍼両穴世間稀」と、当時にお

いては珍しい刺法であることをいう。

四、注文の特徴

注文は、兪穴の位置を明らかにし、刺灸法を指示する。

①横透刺を指示している。これは本文と共通する。そして珍しい刺法であることからみても、本文と注文は同一の作者か、同じ流派の者だと考えられる。膝関から犢鼻、中渚から腕骨など。

②直透刺を指示する。たとえば金門から申脉、商丘から崑崙、間使から支溝、陽陵泉から陰陵泉、内関から外関など、反対側への兪穴への透刺を指示している。

③対穴の指摘がある。上星と太淵、神門と後谿、内迎香と合谷、内関と照海、懸鍾と環跳、肩井と支溝など、セットで使うと有効な兪穴を指摘している。

④刺針が深い。とくに腹部の兪穴は刺針が極めて深い。関元に二寸、中極・中鳩尾に二寸半など。鳩尾では「非老師高手不可下針」と危険性を指摘する。

五、まとめ

①「玉龍歌」には、針刺法や兪穴の使い方などに現代の中医学の萌芽をみることができる。

②唐・宋は灸治療が盛んに行われていたが、相前後するように針治療が拡がり始めたことが推測される。

③鍼灸歌賦による治療は病名治療であり、問診を主とする診察体系であることが推測され、よって脈診などは軽視された可能性が高い。

（北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部）